

(論文)

19世紀後半の生体解剖反対運動についての 研究動向と新たな展望

—アメリカ社会における科学、ジェンダー、動物観を議論する意義を中心に

白石(那須)千鶴

キーワード

19世紀後半アメリカの生体解剖反対運動 白人中産階級 動物観 科学
ジェンダー

はじめに

本稿の議論で用いる生体解剖 (vivisection) という用語は、生きた動物を用いておこなわれる解剖を意味する語として19世紀後半に使われたものである。使用される動物が、その動物自身の治療以外の目的で体を切り開かれる動物実験を意味する¹。西洋医学におけるこうした動物実験の起源は、古代ギリシャのガレノス (Klaudios Galenos, 129?-199?) 以前まで遡ることができるが、近代医学において生体解剖が盛んになるのは、17世紀の近代生理学の誕生がきっかけであった。血液循環説を唱えたウィリアム・ハーヴェイ (William Harvey, 1578-1657) は、25年間の歳月をかけて生体解剖を行うことにより体内の血液循環を観察した。1824年ロンドンで行われたフランス生理学者による公開実験で生きた動物が使用された時には、その実験に反対する声明が60余人のイギリス人医師らの署名とともに提出された。効果的麻酔が医学の世界に導入されるのは1840年代に入ってからのものであり、少なくともそれ以前の生体解剖は、麻酔を使用しないまま生きた動物を解剖していた訳である。欧州および英国でも19世紀中頃まで生体解剖を行う医師は少数派であった。²

実験医学の幕開けの時代を迎えた19世紀後半のアメリカ合衆国 (以下アメリカ) においても、1871年ハーヴァード大学に実験室が建設され、生体解剖が始められた。80年代にはアメリカ国内で生体解剖を行う医師は十数名であったが、1890年代には本格的に動物実験が導入された。この生体解剖をめぐる、主に人道主義者と当時呼ばれた人々は、その反対を唱えて積極的に運動を展開していった。当時、人道主義家として知られていたヘンリー・バーグ (Henry Berg, 1813-1888) や動物愛護家のジョージ・エンジェル (George T. Angell, 1823-1909) などによって1860年代に複数の都市で組織されていた動物虐待防止協会が、生体解剖に抗議の姿勢を表明し反対運動を展開していった。さらに1883年に慈善活動家のキャロライン・ホワイト (Caroline Earle White, 1833-1916) がフィラデルフィアにアメリカ生体解剖反対協会 (AAVS) を組織し、機関誌 *Journal of Zoophily* を発行した。彼らの初期の主張は生体解剖の制限であったが、1887年には生体解剖の完全廃止に要求を拡大していった。

しらいし (なす) ちづる：淑徳大学 国際コミュニケーション学部 兼任講師

こうした富裕で影響力のある階級の人々が指導者となり、中産階級が追従する形で生体解剖反対運動は展開されていった。³

アメリカの生体解剖反対運動を展開した人道主義者たちは当時、改革主義運動の担い手であったことから、この生体解剖反対運動も社会を改革するためになされた運動の一環と捉えられる。当時、移民の大量流入に伴う都市のスラム化の問題改善に対し、積極的に取り組んだ人道主義者たちは、都市生活者の衛生管理の指導から刑務所の待遇改善まで広範囲にわたる活動を展開していた⁴。人間ではなく動物の待遇を問題とする生体解剖反対運動は、その改革運動の活動の中では、異質な運動という印象を与える。しかし、当時の人道主義者たちは、この動物の待遇をめぐる問題を、子供たちの教育の問題に還元させて展開していった。

1894年にはマサチューセッツ動物虐待防止協会が初等・中等学校での生体解剖禁止法の成立に成功した後、1896年には実験医学における生体解剖が最も盛んなワシントンD.C.で同様の法案を成立させることにエネルギーを集中させていった。しかしそこでの法案は1900年にも成立をめぐる公聴会の機会を得ながら不成立に終わっているように、アメリカの生体解剖反対運動は、制限または廃止法案成立という点では芳しい成果をあげておらず、政治面において強い影響力を発揮したとはいえない。⁵しかし研究上では興味深い問題を多数含んでいる。

この人道主義者による生体解剖反対運動を扱う研究は、日本ではあまり注目を集めていないが、アメリカでは、今日においても動物実験の問題をはじめとする動物の処遇をめぐる議論が活発に行われ、多様な動物擁護の運動が展開されている⁶。そうした社会の関心を反映して、アメリカでは生体解剖反対運動は、歴史研究の分野で継続的に取り上げられている。本稿では19世紀後半の生体解剖反対運動をめぐるこれまでの研究の流れを、研究上の立脚点の変化にも注意を払いながら包括的に提示した上で、同運動を科学、ジェンダー、動物観の問題を扱う題材として捉え直す必要性を論じたい。

1. 生体解剖反対運動の研究動向

(1) ヴィクトリア文化の放った反科学主義として

社会改革運動のひとつとして中産階級の人々によって展開されていた19世紀後半のアメリカにおける生体解剖反対運動は、歴史家、ジェームズ・ターナーによる「痛み」に着目したヴィクトリア期の研究に刺激を受け、継続的に研究上の関心を集めている。彼は、生体解剖反対運動の推進者である人道主義者をヴィクトリア時代の精神を最も明確に映し出した存在と捉え、彼らが動物の「痛み」に着目した経緯をその時代の文脈から読み取っている。ターナーが当時の出来事として最も重視するのは、科学の進歩と産業革命の影響である。すなわち彼によると19世紀後半は、ダーヴィンの進化論の広がりにより自然への関心が社会で高まり、人間と動物の境界が薄れていった時代であり、さらに産業革命による社会的経済的重圧の増加が、人々の間に産業革命期以前の牧歌的社会への懐古の気運を生み、道徳的退廃に敏感になっていった時代と捉えられる。こうした時代気運を受けた改革主義者たちが動物への待遇に道徳的退廃を映し出して動物へ「痛み」を与えることに過敏なほどの対応を見せたターナーは指摘している。⁷

人道主義者たちによる生体解剖反対運動を当時の改革主義運動の文脈で捉えるターナーのこうした研究は、社会の退廃を戒めることを彼らの社会的任務と捉え、それが生体解剖反対運動においても中心的役割を果たしていたことを詳述するとともに、運動そのものの社会的

評価に関してはきわめて控えめな評価を下している。すなわち、人道主義者たちが動物の哀れを対象としたのは、それが最も容易に扱おうと考えたからであり、人間を対象とする改革運動が成果を上げられなかったことの単なる代償行為と捉えている。

生体解剖反対運動への否定的評価は、1980年代の研究でさらに端的に現れている。医学の進歩発展に動物実験を必要不可欠とする観点に立つと、生体解剖に反対する人々の存在は、科学の妨害者とされうる。ターナーの研究に触発された科学史研究家パトリア・ゴッセルは、この生体解剖反対論者たちを「間違った方向に突き進んだ感傷主義者」とする捉え方を提示している。すなわち科学の妨害者の挑戦を受けた医学者たちが自ら説明責任を認識し実験医学の成果の啓蒙活動を展開し、生体解剖反対論者の意図とは裏腹に実験医学の普及を促した存在として同反対運動を描出している。⁸

この「感傷主義」という評価は、19世紀後半当時、生体解剖推進者たちが反対論者に投げかけた評価でもある。ゴッセルのこうした否定的な評価は、19世紀後半の生体解剖反対運動が、合理的実質的成果をあげていないことから出されている。科学史の分野で生体解剖反対運動を扱ったこの研究は、狂犬病やその他の伝染病の解明を手がける細菌学、生理学、免疫学などがまさに実利的成果を自らの任務としていたことを高く評価している。しかしながらゴッセルのこうした医学の進歩重視の観点は、成果をあげなかった活動への意義を見落とすという問題がある。例えば、ゴッセルの研究は、生体解剖に反対の立場をとった医師を実験医学の教育以前の古い世代の医師と捉え、新しい医学の進歩に遅れをとった者たちとしか見ていない。

このように、アメリカにおける生体解剖反対運動の評価は、1980年代の研究動向では決して高くない。今日の動物擁護運動に多大な影響を与えた倫理学研究家、ピーター・シンガーもこの人道主義的動物擁護の運動に対しては「感傷的な動物愛護」として一線を画している⁹。しかしながらこの80年代は、アメリカで環境思想や動物擁護運動の勃興の時期でもあった。シンガーの動物解放論に刺激を受けた今日の動物擁護者たちの活動が示しているように、「痛み」の感覚を持つ動物の扱いに敏感なのはヴィクトリア期の人々だけではない。しかも動物の扱いを問題にすること自体が新しく登場したばかりでまだ定着していなかった19世紀とは異なり、20世紀後半の動物擁護運動は実験動物のみならず食料や衣料に使われる家畜動物の処遇改善まで唱え精力的に展開している。その流れを反映して90年代に入るとこの生体解剖反対運動を肯定的に評価する研究が出現し、流れが大きく変わっていく。

(2) 環境思想の歴史文脈での捉え直しおよび生命倫理の原点としての再評価

まず、環境思想の歴史文脈からリサ・ミゲットは、生体解剖反対運動が法案成立などの面で実質的成果を上げなかった点に着目し、大きな成果を発揮しなかった運動の存在もアメリカの環境思想の豊かさを構成する重要な観点と捉えて同運動の積極的評価の可能性を提示した。彼女は、アメリカの環境倫理の歴史的な文脈を野生動物に焦点を当てて検証する中で、生体解剖反対運動の担い手であった人道主義者らの動物観を取り上げている。彼らの動物へのまなざしが、子供をはじめとする弱きものへの救済と強い共通性を持ちながら、アメリカの環境倫理の根底を支える要素となっているとする見方を提供している。¹⁰

さらに、生体解剖反対運動の社会的意義を高める契機となった最も重要な研究としてスーザン・リディラーの研究があげられる。第二次世界大戦期のアメリカで行われた人体実験の問題をテーマに据えたこの研究は、生体解剖反対運動への評価を次のように大いに高めた。

生体解剖反対運動の活動家たちが19世紀後半に声高に主張していたことの一つは、無制限な動物実験は人体実験に発展するという危険性であった。彼らのこの懸念に焦点を当てたりディラーは、第二次大戦期前のアメリカで問題となった人体実験の文脈でヴィクトリア期の生体解剖反対運動を捉え直し、生体解剖そのものの社会的意義を積極的に議論する視角を提示した。¹¹

(3) ジェンダー対立の舞台としての議論の限界とフェミニズムの議論

これに対し、生体解剖反対運動の担い手たちの大半が女性であったことを議論の中心においたクレイグ・ビューティンガーは、同時代の他の女性運動との関連から生体解剖反対運動を捉え直した分析を行い、研究上の視角を広げた。この研究は、生体解剖反対運動の展開に積極的に携わっていた女性たちが、当時の女性運動で最も力を注がれた活動のひとつである禁酒運動に深く関わりをもちながら生体解剖反対を唱えていたこと、およびその反対論は他の女性運動と同様、敬虔なキリスト教徒と良き母親としての道徳性の高さを根拠に展開されていたことに注目して生体解剖反対運動の研究を捉え直している。当時の女性生体解剖反対派の主張から、生体解剖を推進する男性医学者たちを「野蛮」な存在と捉える議論が展開され、他方においては熱狂的に生体解剖反対を唱える女性を推進派医師らが「合理的思考のできない性」と批判したことから、生体解剖をめぐる当時の議論がきわめてジェンダー対立の要素を呈していた点を強調している。¹²

同運動がジェンダー概念構築の分析に重要な題材となりうるという興味深いビューティンガーの示唆は、同時に本質論的議論という大きな壁にぶつかる危険性を課題として残した。すなわち、当時の運動が、その時代の制約を受けたジェンダー観点から自己の性を規定して活動の原動力としていたことを単に映し出すだけでは、むしろその時代のジェンダー観を所与のものとする本質論的議論に絡めとられてしまう。なぜ彼ら／彼女らがそうしたジェンダー観をこの議論に反映させていったのかについての分析が不可欠である。しかも、実際には反対派の活動にも男性の参加者があり、推進派にも女性が存在していたにもかかわらず、男性を生体解剖推進派、女性を反対派と捉える単純化は、当時の性規範のステレオタイプを増幅する危険性も呈した。

ビューティンガーの研究が残したこの問題に対し、生体解剖を力強く押し進めた女性医師を取り上げて、当時の実験科学の分野で果たした女性の役割を高く評価するカーラ・ピッテルの研究が2005年に登場し、生体解剖反対運動の研究に新たな方向性を示す突破口を開いた。ピッテルは、推進派として活躍した女性医師を、女性に「優しさ」や「愛情深さ」を強調して規定する当時のジェンダー観に挑戦する意図から積極的に動物解剖を行った医師として取り上げ、医学界での女性の地位向上のために活躍した存在として高く評価している。他方このピッテルによる研究は、生体解剖反対に立った女性たちも推進派に立った女性医師も、ともに動物を利用して自らのアイデンティティ獲得に戦略的に立ち回っていたにすぎないとする見方を提示し、反対運動そのものの意義は低下させた。¹³

2. 生体解剖反対運動をめぐる研究における今後の課題

(1) 科学、ジェンダー、動物観

以上のように生体解剖反対運動を取り上げた研究は、多様な観点から行われ、運動への評価もかなりの幅がある。しかし動向としてこの運動の研究上の重要性を評価する傾向を強め

ていることが読み取れよう。これらの研究動向から抽出される生体解剖反対運動を扱う研究の成果は、次の三点に集約できる。すなわち、第一に同運動は、「動物の痛み」という新しい観点を19世紀後半の動物観、自然観に導入したとする評価が提示されたこと、第二に、生体解剖反対派と推進派の議論がジェンダー対立の要素を持っていた側面が提示されたこと、第三に、生体解剖推進派として女性医師が男性優勢の医学分野で展開した活躍が描き出されたこと、である。

これら三点は、これまでの研究では同時に扱われることはなかったが、科学の社会的意味、影響力という観点から相互に影響し合った問題点であると指摘したい。すなわち生体解剖反対運動を上記三点のうちどれかひとつの観点から評価するのではなく、当時のジェンダー観および動物観が「科学」という尺度で評価され意味付けをされた上で、複雑に絡み合っただ同運動の評価に結びついていったと捉え直し、次の様な課題を考察する題材と捉える必要性を提起したい。

すなわち、生体解剖反対運動が「動物の痛み」という新たな観点を生み出したと評価されながら、なぜシンガーをはじめとする今日の「動物の権利」論者らは、この反対運動との連続性を否定するのか¹⁴。推進派、反対派の両派に女性の関与を指摘する意義は非常に大きい¹⁵が、女性が科学の進歩に役立つ働きをした側面は肯定されても、なぜ反対派は女性の感傷性という本質論的議論の迷宮に取り残されるのか？ さらに生体解剖推進という行為は科学の進歩への貢献という積極的評価を得られるが、なぜ反対運動に対する評価の尺度も科学への貢献の有無が基準とされ、すなわち科学優先の思考のできない存在として劣位化されなければならないのか？ これらの疑問を考察するために、科学、ジェンダー、動物観の三つの位相が交錯する問題群として生体解剖反対運動を捉え直し検討する必要がある。こうした観点から、一見すると生体解剖をめぐる議論が、動物に感情移入した感傷的な女性たちと科学の発展を優先する男性科学者たちとの対立構造で捉えられ、「非科学的女性」対「理性的男性」という単純なジェンダー構築の問題として扱われがちこの問題を、多角的に捉え直すことが可能となる。

ヴィクトリア期のアメリカ社会において解剖学、生物学などの領域が性差を「科学的」に作り出していったことについては、ルドミラ・ジョーダノヴァやシンシア・イーグル・ラセットの研究を中心に大きな成果が出されている¹⁵。こうした科学とジェンダーの研究結果から、一見自然と見なされる性差が実は社会的文化的構築物であるとする認識に立つことが今日ではかなり社会的に浸透してきている。しかし他方において、21世紀に入った今日においても、自然科学の分野が依然として男性優勢の状況にあることから、ジェンダー研究において科学という知の構造が重要なテーマであり続けている¹⁶。19世紀後半の生体解剖を取り上げる研究で、生体解剖をめぐる議論を反対者のみならず推進者の女性の関与を詳細に扱うことは、医学という科学の分野が女性の活動をどのように扱ったかを分析するとともに、医学の分野での女性の活躍そのものを再評価することも可能となる。

生体解剖の是非に関わった女性たちを反対派および賛成派の両者から扱うことは、男女の差異を強調するフェミニズムと同質性を強調するフェミニズムの両活動を同時に視野に入れることになる。とくに、差異のフェミニズム活動家たちが非難した生体解剖を、積極的に推進した女性医師の活動に着目し、その動機や社会への影響を分析することは、ともすると男性領域化されがちな医学の分野における女性の貢献を見出せる貴重な題材と言えよう。しかしながらここで、フェミニズム研究における動物の問題の扱いについて、注意を要する点が

あることを指摘したい。

男女の同質性の強調から女性の地位回復を求めるフェミニストには、動物を配慮の対象とする女性の活動が女性の地位向上の妨げになると見る傾向を有する¹⁷。例えば、まさにこの生体解剖の問題を考えると、動物利用が科学の発展の可能性を広げるとみる場合には動物の処遇の問題化が科学の発展の妨げとなり、これがともすると、19世紀の男性科学者たちが女性を「非科学的性」としたステレオタイプの再生産を意味する危険性を帯びるからである。しかし科学だけが人間の営みから創り出される知的活動ではない。科学を優先にできない思考を理性的でないとして劣等視するのは、科学を最優先にする前提がないと成り立たない。動物の処遇を考慮する思想の構築も一つの知的創造であるとみるなら、動物の処遇問題を扱うことの汚名は払拭できる。本研究ではこうした認識に立ち、動物の問題を科学中心の価値観に縛られない形で積極的に評価する観点も必要である。

例えば、生体解剖反対運動には、多数の男性も関与していたにもかかわらず、生体解剖に関わったことでジェンダー構築に大きな影響を受けたのは女性の側だけであったのは、なぜなのか？この問いの答えを見出す為には、科学優先のバイアスから離れ、近代科学、特に近代医学が発展過程で拡大させていった政治力との関連から動物擁護の活動を扱う必要がある。すなわち生体解剖反対運動に男性の関与がありながらも科学優先の議論から派生する劣位化からは男性が免除されていく点に注意を払う必要がある。なぜ生体解剖の問題に関わったことから受けたレッテルばりが女性にだけなされたのかを考える手だてとして、科学とジェンダーの議論の中に動物観という分析課題も導入する必要がある。

動物を擁護する女性を感情的として劣位化したままでおくことには、数々の問題性が潜む。実験や食料、衣料に利用される動物の擁護が劣位化されたままでいると、そうした動物擁護に関わる活動が女性の地位を貶めるという後ろめたさがつきまとう。さらには動物の処遇を考慮する意義を減少させることにもつながる。動物擁護が持つ社会的役割、機能を発揮する機会を喪失させることにもなる。しかし最も大きな問題として、19世紀後半の生体解剖反対運動での活動に見られるように、女性主導で展開した運動の過小評価という損失を指摘したい。動物擁護の活動は、本論文で論じてきたように、エコフェミニズム以上に女性の関与の長い歴史を有している。それにもかかわらずフェミニズム研究での注目度が低いのも、こうした科学中心のジェンダー序列化を原因としてあげられるのではないか。

(2) 動物擁護思想および動物擁護運動の歴史文脈化

生体解剖反対運動研究の視角は、以上論じた様に、様々なものがあり、運動の研究上での評価も定まっていない。その理由のひとつに、生体解剖そのものの社会的評価の問題があげられよう。人命に関わる医学研究の分野においては、たとえ命あるものとはいえ、動物の命は人間の命の重さとは比較にならない。しかしながら他方において、科学が人命救助の名の下に何を犠牲にするのかについて看過できないとする倫理観も今日では存在する。1980年以降、アメリカで活発に展開されてきた「動物の権利」獲得運動が示すように、動物虐待の問題視化が常識となった今日では、動物の不必要な道具的利用を問題とする必要性への認知度は高まっている。生体解剖を扱うこれまでの研究の動向からも、同問題の捉え方に非常に興味深い変化を読み取ることができた。こうした揺れ動く生体解剖反対運動への研究上の評価の議論は、同題材を動物擁護思想史の文脈で捉え直したダイアン・ピアーズにより新たな局面を迎えた。

ビアーズは、19世紀後半から現代に至るアメリカの動物擁護の歴史を連続した流れとして捉えることで生体解剖反対運動を展開した人道主義者たちの活動をアメリカの動物擁護思想の形成過程の文脈に位置づけている。これは、それまでの研究では19世紀後半の運動と20世紀末に活発化した運動の連続性を否定する傾向が強かったことに対する新たな視点の提示であると同時に、前述した様に殆ど政治的成果をあげられなかった先駆者たちの動物擁護運動の再評価でもある。ビアーズは、今日の動物擁護の運動が、19世紀後半の先人たちの献身的努力の上に成り立っているとする視点で先駆者たちの運動を組織結成から運動展開まで詳述している。こうしたビアーズの研究により、19世紀後半の生体解剖反対運動が、動物だけを対象とした視野狭窄的な運動としてではなく、人間社会に貢献する意図を明確に保持したものとして描き出されている。¹⁸

生体解剖反対運動が実験科学の進歩を妨害する要素を有することは否定できない。しかしその運動が展開した動物擁護の思想は人間に全く有用性を持たなかったのだろうか。生体解剖反対論者たちは、人体実験への発展を盛んに警告していた。彼らの懸念は杞憂ではなく、実際に人体実験に発展した事例が後にいくつも報告されている。例えば、梅毒患者の脳細胞を患者および遺族の了承なしに動物に移植する実験に使用した事例が1916年におこっている¹⁹。あるいはワクチン開発に囚人を実験に使った事例も問題となっている²⁰。こうした人体実験の問題性は、科学最優先の姿勢では見抜けない。科学の進歩のために利用される存在に注意を払う必要性を主張した生体解剖反対論者の存在意義は、確かに見出すことができる。しかしながら担い手の人種・階級などの構成要素の分析抜きで議論を進めて行くことは、特定の集団の価値判断の再生産になることにも注意を要する。

例えば、この生体解剖反対運動の出発点が白人中産階級の運動であった点を問題にする研究はまだ出されていない。動物擁護運動が、担い手の白人を中心とした議論になっていないかどうかの検討は、今後の重要な課題である²¹。動物擁護運動は、それが動物の為であろうと人間社会の為であろうと、運動の出発点には「愛情」「思いやり」など一見すると無条件に善とされる感情の発露が動機となっている。しかし「愛情」も「倫理」も「道徳」も、ともに社会の中で人為的に育てられていく歴史的構築物であり、歴史研究においては聖域化して扱うことはできない。従って、アメリカの動物擁護の歴史は、19世紀後半に人道主義者たちが動物擁護団体を組織した時点からではなく、さらに遡っていつ頃からどのように動物への愛情を重視する精神性が構築されアイデンティティの拠り所として自己化されていったのかについての分析が重要な課題として残されている。

むすびにかえて—

現代社会において、動物に配慮する意識の必要性に関してはかなり国際社会の間で共通に浸透してきている。しかし動物愛護思想も本稿で一貫して論じてきた様に、文化的構築物であり、それぞれの社会の歴史経緯の中で育まれてきたものである。従って時には動物問題が文化摩擦の原因にもなりかねない。異文化理解の重要な端緒として、アメリカの動物擁護思想の歴史研究が担う役割は決して小さくない。

註

- 1 19世紀後半アメリカの生体解剖の定義については、以下の研究に依拠している。Anita Guerrini, *Experimenting with Humans and Animals: From Galen to Animal Rights* (Baltimore: Johns Hopkins

19世紀後半の生体解剖反対運動についての研究動向と新たな展望

University Press, 2003); Susan E. Lederer, *Subjected to Science: Human Experimentation in America Before the Second World War* (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1995)

- 2 初めて行われた生体解剖では、ガレノス以前の時代の医師ヘロフィロス (Herophilus, 330?- 260?BC) が、生きた人間を使ったと言われている。Guerrini, *op.cit.*: 5-22.
- 3 James Turner, *Reckoning with the Beast: Animals, Pain, and Humanity in the Victorian Mind* (Baltimore: Johns Hopkins University, 1980); ジェームズ・ターナー著 (斎藤九一訳) 『動物への配慮－ヴィクトリア時代精神における動物・痛み・人間性』(法政大学出版局、1994年): 68-104; また「痛み」の概念は、近年歴史研究においても一つの重要な観点として扱われ始めている。例えば、歴史家デイヴィッド・モリスは、「痛み」は単なる神経に伝わる信号ではなく、文化的解釈物でもあると論じている。「動物の痛み」の問題も、神経構造の違いを超えて、それが人間にとって意味を持つ限り歴史研究の題材として取り扱い可能なテーマである。従って生体解剖にまつわる歴史研究においても「動物の痛み」それ自体を単独で扱う視点に立つのではなく、人間に対する意味作用として扱われる。すなわち、「動物の痛み」をめぐる、科学と対決する別の尺度の登場として19世紀後半の生体解剖反対運動およびそれを支えた動物擁護思想という捉え方が可能となる。デイヴィッド・B・モリス著 (渡邊勉他訳) 『痛みの文化史』(紀伊國屋書店、1998年)
- 4 ターナー、前掲書: 164.
- 5 ワシントンD.C.における生体解剖制限法案については次の論文が詳述している。Thomas A. Woolsey, et al. “The Playwright, The Practitioner, The Politician, The President, And The Pathologist: A Guide to The 1900 Senate Document Titled ‘Vivisection,’” *Perspectives in Biology and Medicine* 30 no.2 (1987), 235-258.
- 6 今日のアメ리카における動物擁護の運動については、以下の研究を参考にした。Lawrence Finsen and Susan Finsen, *The Animal Rights Movement in America: From Compassion to Respect* (New York: Twayne Publishers, 1994); Gary L. Francione, *Rain Without Thunder: The Ideology of the Animal Rights Movement* (Philadelphia: Temple University Press, 1996); Diane L. Beers, *For the Prevention of Cruelty: The History and Legacy of Animal Rights Activism in the United States* (Athens: Ohio University Press, 2006); 日本では動物の問題を議論する場合、環境問題が優先する傾向が強かった。拙稿「日本における『動物の権利』論の問題点と展望－環境論から独立した議論の可能性と意義について」『ヒトと動物の関係学会誌』11 (2002年)、64-69頁。最近になり「動物の権利」を議論する著作の翻訳が出されるようになってきた。アンドリュ・リンゼイ著 (宇都宮秀和訳) 『神は何のために動物を造ったのか』(教文館、2005年); ヘルムート・F・カプラン著 (ニトライ陽子他訳) 『死の晩餐－動物の権利と肉食の理由』(同時代社、2005年); マーク・ベコフ著 (藤原英司訳) 『動物の命は人間より軽いのか』(中央公論社、2005年)
- 7 ターナー、前掲書。
- 8 Patricia Peck Gossel, “William Henry Welch and the Antivivisection Legislation on the District of Columbia, 1896-1910,” *Journal of the History of Medicine and Allied Sciences* 40 (1985), 397-419.
- 9 Peter Singer, *Animal Liberation: A New Ethics for Our Treatment of Animals* (New York: Avon Book, 1975); Peter Singer ed., *In Defense of Animals* (Malden: Blackwell Publishing, 1985)
- 10 Lisa Mighetto, *Wild Animals and American Environmental Ethics* (Tucson: The University of Arizona Press, 1991)
- 11 Lederer, *op. cit.*
- 12 Craig Buettinger, “Women and Antivivisection in late Nineteenth-Century America,” *Journal of Social History* 30 (1997), 857-872.

- 13 Carla Bittel, "Science, Suffrage, and Experimentation: Mary Putnam Jacobi and the Controversy over Vivisection in Late Nineteenth-Century America," *Bulletin of History of Medicine* 79 (2005), 664-694.
- 14 19世紀後半の生体解剖反対運動と同様に20世紀後半のアメリカで再び活発に動物擁護が唱えられた。後者の活動は、動物の解放論から発展した「動物の権利」論という形で動物の処遇が議論された。そのきっかけを創出したのは倫理論者ピーター・シンガーであった。彼は盛んに自説の動物解放論が感情や感傷ではないと強調し、19世紀後半の生体解剖反対運動をはじめとする当時の動物擁護論とは別のものとして議論を展開した。詳しくは Singer, 1975; Singer ed., 1985; シンガーの感傷性の否定については、たとえば Singer, "Preface to the 1975", in *Animal Liberation* に記述がある。他方これに対し、フェミニストとしての立場から動物の擁護を唱えるキャロル・アダムズやジョゼフィン・ドノヴァンらは、シンガーをはじめとする「動物の権利」論者たちの理性強調の動物擁護運動に男性中心性の問題点を指摘している。詳しくは Josephine Donovan and Carol J. Adams eds., *Animals and Women: Feminist Theoretical Explorations* (Durham and London: Duke University Press, 1995); Josephine Donovan and Carol J. Adams eds., *The Feminist Care Tradition in Animal Ethics* (New York: Columbia University Press, 2007); さらに1980年代以降の「動物の権利」運動には数々の性差別的要素が見られることも多数指摘されている。動物の社会的地位の向上を求める擁護の運動が、人間の社会の差別を反映したままでは、動物擁護自体も実現されないとC・アダムズは厳しく批判している。例えばC・アダムズはアメリカの最も大きな動物権利運動グループのひとつであるPETA (People for Ethical Treatment of Animals) が行った1991年の反毛皮運動に見られる男性中心性の問題点を厳しく指摘している。詳しくはC. Adams, "Caring about Suffering: A Feminist Exploration," in J. Donovan and C. J. Adams eds., *Beyond Animal Rights: A Feminist Caring Ethic for The Treatment of Animals* (New York: The Continuum Publishing Company, 1996), 170-196; 最近のものでは次の論文でも議論されている。Lesli Pace, "Image Events and PETA's Anti Fur Campaign," *Women and Language* 28 (2005), 33-41; こうした動物擁護運動に見られる男女不平等の傾向を是正する為にも、女性が多数を占めた19世紀後半の動物擁護運動の再評価は、アメリカの動物擁護の歴史を描く上で重要な意味を持つ。女性の活動であることから劣位化された側面についての分析は欠かせない。
- 15 Cynthia Eagle Russett, *Sexual Science: The Victorian Construction of Womanhood* (Cambridge: Harvard University Press, 1989); シンシア・イーグル・ラセット著 (上野直子訳) 『女性を捏造した男たち—ヴィクトリア時代の性差の科学』(工作舎、1994年); ルドミラ・ジョーダノヴァ著 (宇沢美子訳) 『セクシャル・ヴィジョン—近代科学におけるジェンダー図像学』(白水社、2001年)
- 16 「科学とジェンダー」のテーマは、1985年にエヴリン・フォックス・ケラーが先駆的研究を提供して以来、重要なテーマであり続けている。最近ではロンダ・シービンガーが科学とジェンダーをテーマに多数の研究を著している。Evelyn Fox Keller, *Reflections on Gender and Science* (New Haven: Yale University Press, 1985); エヴリン・フォックス・ケラー著 (生島幸子、川島慶子訳) 『ジェンダーと科学』(工作舎、1993年); Londa Schiebinger, *Has Feminism Changed Science?* (Cambridge: Harvard University Press, 1999); ロンダ・シービンガー著 (小川眞里子他訳) 『ジェンダーが科学を変える! ?』(工作舎、2002年); Schiebinger, *Plants and Empire* (Cambridge: Harvard University Press, 2004); シービンガー著 (小川眞里子、弓削尚子訳) 『帝国と植物』(工作舎、2007年)
- 17 詳しくは、拙稿「暴力・女性・動物—「動物の権利」とフェミニズム」『ジェンダー研究』5 (2002年3月)、99-114頁、第一章で詳述。
- 18 Diane L. Beers, *For the Prevention of Cruelty: The History and Legacy of Animal Rights Activism in the United States* (Athens, Ohio: Ohio University Press, 2006)

- 19 詳しくは、Craig Buettinger, “Sarah Cleghorn, Antivivisection and Victorian Sensitivity about Pain and Cruelty,” *Vermont History* 62 no.2 (1994), 88-100: 91.
- 20 Kristine A. Campbell, “Knots in the Fabric: Richard Pearson Strong and the Bilibid Prison Vaccine Trials, 1905-1906,” *Bulletin of History of Medicine* 68 (1994), 600-638.
- 21 例えば、アメリカにおける動物擁護の観点からの肉食主義の議論で、アメリカの倫理的肉食主義は白人の人種的アイデンティティとなっているとする主張がなされている。東洋文化でも長い歴史を持つヴェジタリアニズムを多文化主義社会アメリカの中で白人という特定のグループのアイデンティティとして限定することには、肉食主義文化の排他的特殊化、白人の優位意識の問題が指摘できる。詳しくは Chizuru (Nasu) Shiraishi, “Vegetarianism; Animal Rights, Feminism, and Post-Racial Identity: Examining Debates over Ethical Foodways in The United States and Presenting New Perspectives,” 『国際経営・文化研究』14(1)(2009年11月), 1-18.

主要参考文献

- Beers, Diane L. *For the Prevention of Cruelty: The History and Legacy of Animal Rights Activism in the United States*. Athens: Ohio University Press, 2006.
- Bittel, Carla. “Science, Suffrage, and Experimentation: Mary Putnam Jacobi and the Controversy over Vivisection in Late Nineteenth-Century America.” *Bulletin of History of Medicine*, 79 (2005: 664-694)
- Bittel, “The Science of Women’s Rights: The Medical and Political Worlds of Mary Putnam Jacobi.” Ph. D. dissertation, Cornell University, 2003.
- Buettinger, Craig. “Women and Antivivisection in late Nineteenth-Century America.” *Journal of Social History*, 30 (1997: 857-872)
- Buettinger, “Sarah Cleghorn, Antivivisection and Victorian Sensitivity about Pain and Cruelty.” *Vermont History*, 62:2 (1994: 88-100)
- Campbell, Kristine A. “Knots in the Fabric: Richard Pearson Strong and the Bilibid Prison Vaccine Trials, 1905-1906.” *Bulletin of History of Medicine*, 68 (1994: 600-638)
- Cott, Nancy F. *The Bonds of Womanhood: Woman’s “Sphere” in New England, 1780-1835*. New Haven, Conn.: Yale University Press, 1977.
- Donovan, Josephine and Carol J. Adams eds. *Animals and Women: Feminist Theoretical Explorations*. Durham and London: Duke University Press, 1995.
- Donovan, Josephine and Carol J. Adams eds. *Beyond Animal Rights: A Feminist Caring Ethic for the Treatment of Animals*. New York: The Continuum Publishing Company, 1996.
- Epstein, Barbara Leslie. *The Politics of Domesticity: Women, Evangelism, and Temperance in Nineteenth-Century America*. Middletown, Conn.: Wesleyan University Press, 1981.
- 10 Evans, Sara M. *Born for Liberty: A History of Women in America*. 1989; New York: Free Press, 1997. (『アメリカの女性の歴史—自由のために生まれて (第二版)』小檜山ルイ他訳 1997; 明石書店 2005)
- Finsen, Lawrence and Susan Finsen. *The Animal Rights Movement in America: From Compassion to Respect*. New York: Twayne Publishers, 1994.
- Gossel, Patricia Peck. “William Henry Welch and the Antivivisection Legislation on the District

- of Columbia, 1896-1910.” *Journal of the History of Medicine and Allied Sciences*, 40 (1985: 397-419)
- Grier, Katherine C. *Pets in America: A History*. Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2006.
- Guerrini, Anita. *Experimenting with Humans and Animals: From Galen to Animla Rights*. Baltimore: Johns Hopkins University Press, 2003.
- Henninger-Voss, Mary ed. *Animals in Human Histories: the Mirror of Nature and Culture*. New York: University of Rochester Press, 2002.
- Keller, Evelyn. Fox *Reflections on Gender and Science*. New Haven: Yale University Press, 1985.
- Kheel, Marti. “The Killing Game: An Ecofeminist Critique of Hunting.” *Journal of the Philosophy of Sport*, 23 (1996: 30-44)
- Lederer, Susan E. *Subjected to Science: Human Experimentation in America Before the Second World War*. Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1995.
- Mighetto, Lisa. *Wild Animals and American Environmental Ethics*. Tucson: The University of Arizona Press, 1991.
- Morantz-Sanchez, Regina. *Sympathy and Science: Women Physicians in American Medicine*. Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1985: 2000.
- More, Ellen S. *Restoring the Balance, Women Physicians and the Profession of Medicine, 1850-1995*. Cambridge: Harvard University Press, 1999.
- Parascandola, John. “Physiology, Propaganda, and Pound Animals: Medical Research and Animal Welfare in Mid-Twentieth Century America.” *Journal of the History of Medicine And Allied Sciences*, 62: 3 (2007: 277-315)
- Reiger, John F. *American Sportsmen and the Origins of conservation*. University of Oklahoma Press, 1986.
- Russett, Cynthia Eagle *Sexual Science: The Victorian Construction of Womanhood*. Cambridge: Harvard University Press, 1989. (『女性を捏造した男たちーヴィクトリア時代の性差の科学』上野直子訳 工作舎 1994)
- Schiebinger, Londa. *Has Feminism Changed Science?* Cambridge: Harvard University Press, 1999. (『ジェンダーは科学を変える？ 医学・霊長類学から物理学・数学まで』小川眞里子他訳 工作舎 2002)
- Schiebinger, *Plants and Empire*. Cambridge: Harvard University Press, 2004. (『植物と帝国』小川眞里子・弓削尚子訳 工作舎 2007)
- Shiraishi, Chizuru (Nasu) “Vegetarianism; Animal Rights, Feminism, and Post-Racial Identity: Examining Debates over Ethical Foodways in The United States and Presenting New Perspectives.” 『国際経営・文化研究』14 : 1 (2009年11月 : 1-18)
- Singer, Peter. *Animal Liberation: A New Ethics for Our Treatment of Animals*. New York; Avon Book, 1975.
- Singer ed. *In Defense of Animals*. Malden: Blackwell Publishing, 1985.
- Tober, James. *Who Owns the Wildlife? The Political Economy of Conservation in Nineteenth-Century America*. Westport, Conn.: Greenwood Press, 1981.
- Turner, James. *Reckoning with the Beast: Animals, Pain, and Humanity in the Victorian*

- Mind*. Baltimore: Johns Hopkins University, 1980. (『動物への配慮－ヴィクトリア時代精神における動物・痛み・人間性』 斎藤九一訳 法政大学出版局 1994)
- Wells, Susan. *Out of the Dead House: Nineteenth-Century Women Physicians and the Writing of Medicine*. Madison, Wisconsin: The University of Wisconsin Press, 2001.

邦語文献

- 岡田勝『アメリカ禁酒運動の軌跡』ミネルヴァ 1994.
- ジョーダノヴァ・ルドミラ／宇沢美子訳『セクシャル・ヴィジョン－近代科学におけるジェンダー図像学』白水社 2001.
- モリス・デイヴィッド・B.／渡邊勉他訳『痛みの文化史』紀伊國屋書店 1998.
- 拙稿「暴力・女性・動物－『動物の権利』とフェミニズム」『ジェンダー研究』5 (2002年3月：99-114頁)
- 拙稿「日本における『動物の権利』論の問題点と展望－環境論から独立した議論の可能性と意義について」『ヒトと動物の関係学会誌』11 (2002年：64-69頁)
- 常松洋『ヴィクトリアン・アメリカの社会と政治』昭和堂 2006.

(受理 平成22年1月9日)